

SHOW-HEYシネマーム

★★★★★

アンジェントルメン

2024年／アメリカ・イギリス・トルコ合作映画

配給：KADOKAWA／120分

2025（令和7）年4月5日鑑賞

T・ジョイ梅田

Data

2025-36

監督・脚本：ガイ・リッチー

製作：ジェリー・ブラッカイマー

原作：ダミアン・ルイス『Churchill's Secret Warriors』

出演：ヘンリー・カヴィル／エイザ・ゴンザレス／アラン・リッチソン／アレックス・ペティファー／ヒーロー・ファインズ・ティフィン／バブ・オルサンモクン／ティル・シュヴァイガー／エンリケ・ザガ

みどころ

「“無許可、無認可、非公式”の秘密作戦 英国軍にもナチスにも見つからず、Uボートを無力化せよ！」。それをテーマにした“掘り出し物”を、金曜日の夕刊紙上で発見！「潜水艦モノは面白い」を持論とし「Uボート」ファンたる私には、こりや必見！

チャーチル首相は議会にも内閣にも諮らず、独断専行で英国特殊作戦執行部（SOE）の設置とポストマスター作戦を命令！アレレ、アレレ、イギリスは議会制民主主義のお手本の国ではなかったの！？そんなことがバレたら、たちまち首相の首が飛ぶこと確実だが・・・。

第1作『007 ドクター・ノオ』（62年）、第2作『007 ロシアより愛をこめて』（63年）と、シリアルスなスパイものだった『007』シリーズは、第3作『007 ゴールドフィンガー』（64年）からド派手なスパイ活劇に変質したが、監督をガイ・リッチー、プロデューサーをジェリー・ブラッカイマーとする本作は、最初から多くの登場人物たちの個性とアンサンブルの名を売りにした大活劇だから、こりや必見！

スリル満点の展開の中でも、任務の成功は最初からの約束ゴト。さらに、想定外の事態の中、“プランB”への切り替えもお見事だ。その戦果は原作戦以上のものだが、最後の“めでたしめでたし”は、さて如何に？

■掘り出しモノを発見！こりや必見！こりや大満足！■

年間約100本の映画を鑑賞し、年間2冊の『SHOW-HEYシネマーム』を出版している私は、毎日映画の情報収集に努め、「訟廷日誌」と付き合せながら、毎週の鑑賞作品と鑑賞日そして劇場を決めている。しかし、必然的に通う映画館は限定されているから、当

然情報漏れしている作品もある。他方、毎週金曜日の夕刊には、私がとっている3つの新聞各紙に上映作品の紹介がされているので、そこから得られる情報は貴重だ。しかし、本作は2025年4月3日（金）夕刊の新聞紙評で初めて情報を得たものだ。

『アンジェントルメン』というタイトルだけでは何の映画かさっぱりわからないが、ナチス・ドイツによるUボートの攻勢にさらされていることによって、アメリカ参戦が思うように進まないと考えていたチャーチルが、Uボートの補給を叩くために採用した特殊作戦が「ポストマスター」。そして、チラシに「第二次世界大戦下、史上初の“非公式”特殊部隊が歴史を変えた—」「007のモデルにもなった 型破りなヤツらのとんでもない実話」の文字が躍る本作は、その「ポストマスター」を面白く描いたものだと知ると、興味津々だ。しかも、監督がガイ・リッチー、プロデューサーがジェリー・ブラッカイマーのコンビによる最新作だと知ると、こりや必見！

私は、ガイ・リッチー監督の『アラジン』（19年）（『シネマ45』未掲載）はイマイチだったが、『シャーロック・ホームズ』（09年）（『シネマ24』198頁）、『コードネーム U.N.C.L.E』（15年）（『シネマ37』218頁）、『キング・アーサー』（17年）（『シネマ40』未掲載）、等をしっかり楽しんだ。また、ジェリー・ブラッカイマーのプロデュース作では、『トップガン』（86年）、『アルマゲドン』（98年）、『パイレーツ・オブ・カリビアン』シリーズ（03年、06年、07年、11年、17年）（『シネマ3』101頁、『シネマ11』20頁、『シネマ15』14頁、『シネマ40』未掲載）、『トップガン マーヴェリック』（22年）（『シネマ51』12頁）等をしっかり楽しんだ。たまたま、翌4月5日（土）の上映時間がピッタリ予定にはまったこともあり、T・ジョイ梅田で鑑賞した。その結果は、こりや大満足！

■■ポストマスター作戦の内容は？その是非は？■■

イギリスのチャーチル首相は、今でこそナチス・ドイツによる執拗なロンドンへの空爆にとことん耐えた名宰相と評価されているが、少し視点を変えれば、単なる頑固者！？第一次世界大戦後、アメリカは空前の好景気を誇ったが、ナチス・ドイツの抬頭を許したヨーロッパに対しては長い間、“孤立主義”を貫いてきた。しかし、フランスの降伏だけならまだしも、イギリスまでナチス・ドイツに征服されてしまうと、さすがにヤバい。そう考えたアメリカのヨーロッパ戦線への参入を拒んだのが、ドイツ軍が誇るUボートによる軍艦、商船への無差別攻撃だった。そこで、Uボートへの補給路を断つことを目指すチャーチル首相（ロリー・キニア）が独自に立案したのが、かの有名な英国秘密情報機関MI6の前身ともいわれる「特殊作戦執行部=SOE」の設立と SOE によるポストマスター作戦の実行だ。

SOE に召喚されたガス少佐（ヘンリー・カヴィル）は、チャーチルの命を受けたコードネーム「M」ことガビンズ准将（ケイリー・エルウィズ）と、その部下のアン・フレミング（フレディ・フォックス）から、「英國軍にもナチスにも見つからず、北大西洋上のUボートを無力化せよ—」を内容とするポストマスター作戦遂行の命令を受けたが、この任

務は「無許可、無認可、非公式の秘密作戦」というからすごい。つまり、議会制民主主義のお手本ともいえるイギリスで、当時首相を務めていたチャーチルは、議会はもとより、内閣にも諮らず、首相一人の独断（と偏見）で、SOE の設立とポストマスター作戦を立案し、その実行を命じたわけだ。そのため、SOE は「非紳士的な戦争省」と呼ばれたうえ、無許可、無認可、非公式のポストマスター作戦に従事するガス少佐たちは、「英國軍に見つかれば投獄、ナチスに捕まれば拷問と死」が待つだけというチョー苛酷な命令を受けることになったわけだ。

しかし、議会制民主主義のお手本たるイギリスで、そもそもそんな作戦が許されるの？本作を鑑賞するについては、「ああ、面白かった！」の感想とは別に、その点についてもしっかり考える必要がある。

■□知らない俳優達の個性とアンサンブルの妙をタップリと■□■

アクション映画は、強烈な個性を持った一人の主人公の魅力で成立するものと、多くの登場人物（俳優）たちの個性とアンサンブルの妙で成立する映画の 2 種類がある。前者の典型が、『007』シリーズや『ランボー』シリーズ等であり、後者の典型が『ナバロンの要塞』（61 年）や『大脱走』（63 年）等だ。しかして、本作は近時のイギリス発のアクション映画シリーズとしてヒットしている『キングスマン』（14 年）（『シネマ 37』213 頁）シリーズと同じく、多くの登場人物（俳優）たちの個性とアンサンブルの妙で成り立つ映画だ。そのため、残念ながら私は本作に登場する人物は役名も俳優名も知らない人ばかりだ。

黒澤明監督の名作『七人の侍』（54 年）は、前半部で、盜賊と化した野武士退治を村民から依頼された侍・島田勘兵衛（志村喬）がその依頼を受け入れ、実現するために「七人の侍」を結集していくストーリーが描かれていたが、同作はそこから面白かった。それは同作をハリウッド版にリメイクした『荒野の七人』（54 年）でも同じだった。本作の導入部でも『七人の侍』と同じように“ポストマスター作戦”的リーダーとしてメンバー集めの権限を一手に握ったガスが、英國軍に見つかれば投獄、ナチスに捕まれば拷問と死という、非情すぎる作戦に挑むメンバーとして、①航海士のヘンリー（ヒーロー・ファインズ・ティフィン）、②潜水工作員フレディ（ヘンリー・ゴールディング）、③怪力男アンダース（アラン・リッチソン）を次々と集めていくストーリーが描かれるので、それに注目！

「英國軍にもナチスにも見つからず、北大西洋上の U ボートを無力化せよ」との“抽象的な命令”を具体化したものは、「ドイツ軍が基地を置くフェルナンド・ポー島に停泊している U ボートに燃料を補給するイタリア船籍のドゥケッサ号を爆破せよ」というものだったが、その任務を遂行するためには、現在ナチスに拘束されているアップル（アレックス・ペティファー）の力が不可欠であると判断したガスは、ラ・パルマ島からアップルを救出するべく、上記のメンバーのチーム力を結集する姿が描かれるので、それにも注目！

他方、ガスが率いるチームとは別に、フェルナンド・ポー島では M が手配した 2 人の潜入工作員も準備を進めていた。それは、現地で裏カジノを経営しナチス高官から情報を集

めるヘロン（バブス・オルサンモクン）が、ニューヨークの金トレーダーに扮した女性マージヨリー（エイザ・ゴンザレス）をナチスの幹部ハインリッヒ・ルアーダ佐（ティル・シュヴァイガー）に引き合わせ、ルアーダ佐を誘惑して気をそらせるというミッションだから、それにも注目！いわゆる「色仕掛け」作戦は、古くは『クレオパトラ』（63年）でも、クレオパトラがシーザーを誘惑するシークエンスで描かれていたが、本作で紅一点として出演する女優エイザ・ゴンザレスが演じるマージヨリーのナチス幹部に対する“色仕掛け”の成否は如何に？

本作中盤では、役名も俳優名も知らない個性的な登場人物たちによる個性豊かなアンサンブルの妙をたっぷりと楽しみたい。

■口■予定変更もやむなし！？その場合のプランBの捻出は？■口■

私は、『ナバロンの要塞』（61年）を映画館で観た記憶はないが、TV放映で何度も観たのは、イギリスの特殊部隊が決死の覚悟で「ナバロンの要塞」にたどり着くまでの物語がリアルで面白かったためだ。それに比べると、本作のラ・パルマ島での“アップル救出作戦”は、一方で「カイカン！」と思うものの、あまりにも容易すぎどころがマイチだ。それと同じように、ヘロンとマージヨリーによるナチス幹部ルアーダ佐への“色仕掛け作戦”も、マージヨリーの潜在的能力と男たらしのテクニックの見事さがあまりにも際立つてしまうから、面白いと言えば面白いが、現実味が薄いところが難点だ。また、パンフレットを読んで私は、初めてマージヨリーを演じるエイザ・ゴンザレスは、『アンビュランス』（22年）（『シネマ50』85頁）に出演した女優であることを知ったが、同作でそれほど強い印象を受けなかったことから分かるように、超ベッピン女優ではないところがマイチだ。

それはともかく、本作が面白いのは、やむなく予定変更となった時に、“プランB”を捻出していく面白さだ。第二次世界大戦中のあの時代、戦うために何よりも重要な情報（管理）が不十分であったのは仕方ない。そのため、フェルナンド・ポー島に停泊しているドゥケッサ号の爆破命令を遂行するべく、ガスたちは必要な爆弾の準備を整えていたものの、苦労の末にやっとナチスをパーティに集めたヘロンとマージヨリーから、ドゥケッサ号の鉄板が補強されたとの情報を得ると、やむなく爆破計画の変更を！だって、せっかく爆弾を船底に仕掛けても、穴が開かなければ作戦は失敗！メンバーは全員逮捕！となってしまうからだ。しかし、急にそんなことを知られても・・・？さあ、そこから本作のクライマックスに向けて始まる“プランB”的捻出は？そしてその実行と成否は？

日露戦争における日本の連合艦隊VSロシアのバルチック艦隊の、天下分け目の戦いとなつた日本海海戦では、秋山真之参謀が立案し、東郷平八郎司令長官がその採用を決定した“T字戦法”によって、世界の海戦史上最大の勝利を得たが、その前に何度も実施した“旅順港閉塞作戦”は、広瀬武夫少佐の戦死にもかかわらず、結局中途半端なものに終わってしまった。ドゥケッサ号爆破作戦を進めてきた今、ドゥケッサ号の中にはUボートへ

の補給燃料をはじめとする膨大な資材が積み込まれていたが、その船底に爆弾を仕掛けでの爆破が不可能と判断された今、“プランB”の内容は？その遂行は？それは、あなた自身の目でしっかりと確認してもらいたい。そりゃ、“プランB”的方がイギリス軍にとって大いに嬉しいことは明らかだが・・・。

■口■任務達成のご褒美は？勲章は？報酬は？■口■

本作に登場するイアン・フレミングが、自分自身の体験を踏まえて小説上で作り出した男が、「殺しのライセンス」を持つMI6のスパイ 007ことジェームズ・ボンドだ。しかし、まさかその映画が 25 作、50 年間も続くシリーズになろうとは！？

スパイは何よりも潜行性が大事だから、「スパイモノ」は本来シリアルなはず。それは村山知義の原作を山本薩夫監督が、市川雷蔵主演で映画化したメチャ面白い映画『忍びの者』(62年) シリーズをはじめとする日本の「忍者モノ」で共通するものだが、『007』シリーズは第1作の『007 ドクター・ノオ』(62年)、第2作の『007 ロシアより愛をこめて』(63年) こそ、そのルールを守っていたが、第3作『007 ゴールドフィンガー』(64年) や第4作『007 サンダーボール作戦』(65年) になると、がぜんジェームズ・ボンドの女好きの性格が真正面に出るとともに、激しいスパイ活劇ものに変質していった。同シリーズの大ヒットはそのためでもあるから、その評価は難しいが、好き嫌いで言えば、私は第1作、第2作のシリアルなものが好きだ。また、ジェームズ・ボンドの女好きの性格が強調される中、休暇を女と過ごすボンドの姿が必ず描かれるようになったし、任務を遂行した後のご褒美として、彼には女との休暇が与えられるようになった。すると、ジェームズ・ボンドが所属する MI6 の前身ともいえる英國海軍情報部でも、任務を完遂したガスたち“アンジェントルメン”ご一行様にはそれなりのご褒美が？

そう思っていると、意外にも事態は逆！英國特殊作戦執行部（SOE）の設立やポストマスター計画の立案者であるチャーチル首相の独断専行ぶりが白日の下にさらされ、チャーチル自身が議会から弾劾されてしまうと、ガイたちにはご褒美とは逆の「刑務所行き」の沙汰が下ったから、アレレ、アレレ。もっとも、ガスたちのポストマスター作戦参加者ご一行がそれに抵抗することなく、すんなり、それに従うところが本作のミソだ。彼らの心境は如何に？本作の鑑賞後は面白かっただけでなく、それをしっかり考えたい。

2025（令和7）年4月8日記